ボーイスカウト東京才四団

機関紙

No. 88

Sept. 1, 1968

スカイル

キャンプをおわって

美藤　章

各隊キャンプ、リーダー研修会、合同キャンプファイヤー、その他、全ての夏期のプログラムを、祈りのうちに無事終えることが出来て感謝です。御父兄の皆様の厚いご協力、そしてリーダーの皆様の様々の努力や配慮に対し、私は心からこう言いたいと思います。

「ご協力、本当にありがとうございました。そして、御苦労様。さあ、これからもしっかりと頑張ろう!!」と。

「キャンプとかけて何と解く」

「甲子園の夏の高校野球と解く」

そのこころは

「スカウトが活躍する」

このなぞなぞ問答はガールスカウトの上級キャンプに同行した、上級団委員の斎藤先生とローバーの鈴木君との間でかわされた問答だと聞きました。

周知の通り、「スカウト」という言葉は「斥候、偵察、探察」の意味があり、この動詞も可能です。甲子園で活躍するスカウトたちは鋭い目で有望なる能力、実力の持主を捜し、探察しています。ただ、多額の金をもってその能力を「もの」にする有様は考える余地を残していますし、せっかくの能力も金によってダメになってしまうことすらあります。しかし、スカウト自体のねらいは本当に有望なる新しい能力を探すことでしょう。

私たち、スカウトはいったい「何を」スカウトし、どのように「もの」にするのでしょうか。私たちは夏の様々なプログラムが無事終えたということに安心するだけにはとどまりません。夏のプログラムだけでなく、毎週土曜日の二時間の各隊ミーティングの現場の中に、真実のものを、真剣にスカウトする鋭い目が輝き続かなくてはなりません。その目がこれからも、じっくりと土曜日の二時間のミーティングに睹けるファイトと真剣さを生み出すものと信じています。

年少隊

年少隊副長補　片岡　孝

舎営に胸はずませてバスから降りてくるスカウトの顔が、夕陽に染まって一層赤味を帯びていた。各自リュックを背負って、舎営地である羽村国民宿舎「清流荘」に到着した。ここは、浄水場への水の取り入れ口のある所で、清流荘のすぐ横を多摩川が流れており、背後には丘陵がある。近くの町名（草花）にもある様に、百余種もの草花が繁殖し、多くの鳥がいるそうです。

夕食、入舎式を終えた後、組集会。教会で作っていった物や、小枝、木の実等を利用して、各組それぞれ工夫して自分達の室の飾り付けをした。

舎営地での最初の朝、笛音と共に全員起床、体操、洗面、掃除を行い、朝礼、朝食組集会とプログラムは進み、昼食後、組集会で作った水鉄砲を持って、多摩川へ水泳に行った。泳ぐスカウトもいれば、水鉄砲で遊ぶスカウトもいて賑かだった。リーダーはスカウト達の集中攻撃を浴び、内臓がとび出しそうだった。夜、サークルファイヤーがあったが、各組元気がなかった。

三日目のハイライトはハイキングである。月の輪は本隊と分かれ、地図の見方、三角点、手旗等の訓練を取り入れながら、本隊と逆コースを進んだ。夜の組集会はデンチーフを中心に、ハイキングでの課題整理をした。その間、隊リーダーとデンマザーは杉原さんを囲んでミーティングを行い勉強をした。月の輪の動作がにぶいので、非常呼集をかけた。皆ねぼけて、ベッドの上に坐ったままであった。しばらくして眠い瞳をこすりながら集合した。所要時間十五分。それから宝探しをしたが、誰も宝を見出す事ができなかったのは残念である。

四日目、各隊のお客様がお見えになった。昼食は、デンチーフの作ったカマドでおかずを作った。皆、楽しそうに作っていたが、中には胃薬になりそうな物もあった。

夜、キャンプのハイライト、キャンプファイヤーが行なわれた。夕方から雨が降ったり、やんだりで、戸外、室内いずれでやるか迷ったが、結局、外でやる事にした。歌、劇に各組趣向をこらし、元気もあって楽しいひとときを過した。

五日目、教会に四時頃、到着した。

最後に、年少隊夏期舎営に御助力下さった方々に、感謝致します。

少年隊

少年隊々長　柳　健一

昨年、条件の万事そろった山中野営場で基本的なプログラムを消化している今のスカウト達のために、今年は開拓を中心にしたキャンプサイトが得られるよう検討しておりました所、カブの里見さんの紹介で伊豆の荒磯に面したミカン畠の一角をお借りする事が出来ました。

サイトは畑の跡でしたが、コヤシがきいているためか大変に夏草が茂っており、開拓にはもってこいの場所でした。班の中には三名のところもあってこの一日はスカウト達にとって特に初級のスカウトにとってかなりきつかったようです。しかし、この開拓はあとでスカウト達に自信と誇りを呼び起こさせるに違いない。

二日目も開拓であった。昨日やっと切り開いたサイトに、近くの藪から切り出した竹で、立カマド、食卓等を作った。ただ、サイトの設計がまずく、一度作った工作物を配置がえした班がかなりあった。まず計画の大事さを学んだ。

三日目、やっと海に行けた。海までは、地図上で直線距離を計るとわずかしかないが、歩くと大変な苦労をする所で、沢に下

りミカン畠のわきをよじ登ると今度は海に面した絶壁をへっぴり腰で又下らなくてはならない。その海岸には、きれいな沢が注いでいて、渇いたのどをうるおしてくれた。

四日目はハイキング、大小の岩がごろごろしている海岸線を南下する事数キロついに荒波の打ちよせる岩場に来てそれ以上の南下が不可能になり2級以上はここでリンツーを張って野営、富戸の港で漁業、農業の調査をした。初級はここから別のルートを通って地図だけをたよりに二人一組でサイトまで帰った。遠藤君のハプニングが最高に楽しかった！……？

五日目は、皆サイトに帰り、スカウツオウンをした後、海に出て、泳ごうとしたが海が荒いため中止、午後鳥料理をした。三島君が鳥の首チョンを見て目を丸くしていた。暗くなって楽しいキャンプファイヤーをした。坂井君のタレントぶりが素晴しかった。

六日目、いよいよ帰る日になった。号令とともに皆がいっせいに徹営にかかった。本部の大きなベルテントが一分五六秒でたたまれてしまった。

こうして無事キャンプをする事が出来た陰に農家の石川さん、シニアの諸君の大きな援助のあった事を感謝したいと思います。

年長隊

年長隊副長　百塚健一

今年も昨年にひき続き、移動野営を八月十日から十五日に行ないました。伊豆の下田から土肥までを、班別にコースをとり、一人のケガ人も出さずに、無事十五日に帰ってきました。

このキャンプでの目的は、下田から土肥までの六十キロの行程を、五泊六日の日程で歩きぬくということと、土地の人との交流を計るということでした。

今年の野営では、スカウト達自身で、新しいことを考えだしていました。

その一つは、キャンプにはリュックをしょって行くものと思われがちであったが、ショイコを使って、パッキングをしやすくしたこと、また土肥での食事でチラシ寿しを作っていましたが、土肥というのは漁港なのでその土地状況を良く考えていると思いました。

シニアスカウトの年代になると、これ位下調べがキャンプに行くのに必要である。いや、そうしなければならないのではないか。また社会へ実際に自分で接触するにはキャンプなどで、買出しや水をもらったりする時の言葉使いなど、得る所は大変多いと思います。

隼班は、下田から加増野、松崎、田子を経て、土肥に十四日の昼頃、亀班は隼班より、一日遅れて出発しました。コースはやはり下田から蛇石、松崎、田子を経て土肥に十四日の昼すぎ合流地点に着きました。

特に亀班は、十三日の日は二十キロ以上も歩いてきました。ハイキングでの二十キロというのは簡単に歩くことが出来ますが三十キロもの荷物を持ち、前の日も歩いてきた上の二十キロという距離は、並たいていのことではありません。このことを見ても、スカウトにとっては、想い出深いキャンプになったことと思います。

徹　営

「班長、そこらの三本柱を全部抜いて穴に埋めときました」

――新入スカウト――

感想

カブ

4くみ　久保　義男

七月二七日(土)

僕は、みんなとおなじせいふくをきられて、とてもうれしかった。キャンプにもみんなと行かれたので、うれしかった。一日めは、何もわからなかったけれども、くみの人たちが、いろいろ、おしえてくれたので、たすかりました。キャンプファイアーもたのしかった。ピクニックも十キロあるいたけれど、おもしろかった。たま川に入った時は、水がつめたくって、おどろいた。かえる日のまえにしょうをもらいました。うれしかった。またらいねんのキャンプが早くくるといいなとおもいました。

でんまざあ、でんちいふも、なかねくんもありがとう。

月の輪　安藤昭良

野外料理

キャンプの三日目、昼食は清流その庭で野外料理をした。ごみのあなをほったり、あなをほってかまどを作ったり、みんな、めいめいにしごとを始めた。「アルミはくにバターをぬって。」「じゃがいもを切って」などと、しじがとぶ。「トントントン」などと野さいを切る音、「なんだ、このほうちょう、肉のほうがやさいより、よく切れるよ。」などとにぎやかだ。いいずみさんが、かまどに火をたく。米をたいていると十分ほどでふいた。いいずみさんが見ると水がたりなすぎてしんが米にできてしまったそうだ。あたりからいいにおいがにおってくる。米がたけたら、はんごうをさかさにしたり火の中でおかずを作ったり、たいへんだ。水をくんできたり、木をもやしたり、やがてちょうりが終わったので、かたづけたりする。やがて昼食になった。やっぱり自分でたいたごはんやおかずはおいしい。みんなでたのしくたべた。

このことは、ボーイスカウトへ行ってもやくに立つことなので、よいけいけんをしたと思う。

キャンプ〇〇シリーズ

一、寝ぼけて食料テントを便所テントと間違える〇〇

一、いもしないリーダーに夢でうなされる〇〇

ボーイ

タイガー班　守戸　修

ぼくは、今回のキャンプには今までにない期待をもっていた。それは、ぼくが班長になって初めてのキャンプである。また、このキャンプが、BS最後のキャンプになるかもしれないのだ。キャンプについての計画は、六月中旬からやり始めた。次長の遠藤君といろいろみんなの係、やる仕事、順序、どのようなカマド、食卓、調理台を作るか、昨年の山中湖キャンプで困ったことは何か、みんなの進級をどうしようかなどいろいろ決めた。また、いろいろ班備品も買った。特にむずかしかったのは、カマド、食卓だ。昨年のキャンプでは、ひとたび雨がふってしまったら、食卓は水たまりとなり、立ちカマドの土も流れてしまい、どうしようもなかった。そこで、まず雨がふっても、ちゃんと食事ができるようにしなくてはならない。そこで、食卓もカマドも竹で作るように設計した。カマドは立ちカマドに、食卓は折りたたみいす式に、寸法まで決めた。また、杉田君、遠藤君の進級も予定通りすんだ。何もかも設計上ではうまくいった。あとは、全力をつくし、三島君の希望している最優秀班をめざすことだ。

いよいよキャンプだ。期待に胸をふくらませ、バスに乗った。バスの中ではどうゆうわけか、ぐっすりねてしまった……。

設営の笛が鳴った。ぼくは一番新しいカマを持って、太いつるを切り始めた。第一本目、なかなか切れない。思いっきり力を入れて左へ切りこんだ。つるがグイーンと回った。ドスッ。左の足首にカマがあった。「つるは切れたかな?」と、足元を見たとき、血がストッキングに、にじみながらドッと出てきた。その時、初めていたいことに気がつき、村上君に脱脂綿をもってこさせた。少し黄がかった白い脂肪がプクプクでてきた……。しまった、しまった、しまった、と思っているうちに、いたい!!……またいたい……。病院のベットの上で、ますいの注射をやられているところだ。すごくいたい。とてもいたい。今までにやられた注射の中で一番いたかった。

折りたたみベットの上にねていた。「テントをここへ移動しろ。」今考えてみるとんだことを言ってしまったもんだ。寝ていてわからなかったのか、夜になって初めて気がついた。みんながゴロゴロおしよせてくる。地面がななめなのだ。

ぼくがしっぱいしてしまったために、ずいぶん時間と労力とをついやしてしまった。今までの計画もだいなしだ。ぼくは新しい計画を作りなおした。

ようやく立てるようになり、リーダーからは、さんざんどやされ、みんなからもいろいろなことを言われた。まったくつまらなかったが、念願のリンツ野営に参加できた。昨年に比べ、とても楽でおもしろいリンツ野営だった。遠藤君の白ビニール○○○○……。　ワハハハハ―。今でも考えただけでおかしくなってしまう。朝のみんなの顔もさまざまだった。カがたくさん出て、人形のようになった人などとてもゆかい。ぼくは、おでこの左はしに集中攻撃を受け、お岩さんのようになってしまった。鳥の首チョンも二度目。昨年の炭に比べ、とてもおいしかった。

閉場式の時だ。「タイガー班。」大内副長の声がひびいた。「え?!　タイガー班?　ぼくらの班ではないか。そんなはずはない。いや、タイガー班とはっきり聞こえた。」ぼくは思いもよらぬことに、「ハイ!!」とへんじをして、副長の前に出ていった。三島君は大喜こびだった。みんなの顔も、え

顔に変わった。しかしぼくは、何かもの足りない気がしてならなかった。でも最優秀班はとれたのだ。「タイガーばんざい。」とどなりたかったが、そんなひまはない。もう乗車しなくてはと、バスにいそいだ。

とても楽しいキャンプだった。とてもつまらないキャンプだった。とてもためになったキャンプだった。ほんとうにいい体験をした。ぼくはそう思っている。このキャンプで得た複雑なものを、今度のキャンプにいかそうと思う。また、班員の諸君も、いかしてほしいと思う。

キャンプ〇〇シリーズ

一、飯盒にトイレットペーパーをつめてくる〇〇

一、防水しすぎてマッチを使えなくする〇〇

一、着きれない程、替の下着をもってくる〇〇

一、アレが心配で夜一睡もできない〇〇（カブに多い）

シニア

小松　正太郎

僕がシニアに入って初めての夏季キャンプであり、そしてBSにいる時には経験したことのない移動キャンプであった。

移動キャンプをやると聞いたのは、キャンプに行く三週間位前であった。参加人員が非常に少なく、各班二名だった。班毎の計画で下田から土肥まで行くのである。僕達の班は出発を一日おくらせて十一日にした。

荷物は、食料と備品を二人でわけて、個人備品を入れると、約三十キログラム位になって了った。パッキングをしやすくするために、しょいこを用いた。たしかにパッキングはしやすかったが、使いなれないために肩と腰が非常にいたかった。

食料は、東京でいっぱい買いこんでしょっていったが、もっとへらして、現地購入を考えればよかったと思う。

キャンプ地は、最初下賀茂の渡辺さんの畑を借りた。コーラとすいかをさし入れに持ってきてくれたり薪をもらったり、とても親切にしてくれた。二日目は、蛇石からちょっと山に入った所だった。わき水があり、キャンプ地に適した場所はあったが、薪が生木しかなかったので、とても困った。一日目、二日目とも、ぶよが沢山いて三、四時間位しか寝られなかった。三日目は、宇久須港の砂浜でやったが、ぶよが少なかったのでよく寝られた。最後の夜は土肥の金山の下で泊った。

いろいろなことがあったが全体を見て感じたことは、計画をたてるのが急であったこと、土地の人に道や所要時間を聞いても人それぞれ異っていて、あまりあてにならないこと、海がとてもきれいであったことである。

来年は、西海岸で固定か移動キャンプでも、もっと歩く距離をへらして内容の充実したキャンプをやりたい。

最後に、今年のキャンプを一言で言い表わすと、「よく歩いたなあ！……」の一言につきると思う。

飯泉和行

今年のシニアの移動キャンプを、ふり返ってみて、まず一番、感ずるのは、下田―土肥間、六十キロを、歩き通すということで、頭がいっぱいで、他のことが、おろそかになりすぎたことである。

時間にルーズになり、朝出発が、九時半頃になったり、宿泊地を探すのがへたなのか？　不運だったのか？　なにしろ四時頃着いても、場所探しに、一時間余りかかって、実際にリンツー張りを始めるのが、五時すぎになってしまったり、出発が遅れたためもあったりして、当初考えていた善行が、ろくにできなかったり……。そのためか、土肥に着いた時、あまりうれしさがわきあがらなかったのを、記憶している。

しかし、六十キロ歩いたということは、僕にとっては、非常な自信がついた。これからは、この自信を土台にして、移動キャンプにおいて、歩くこと以外で、なにか大きな収穫を得られるようにしてゆきたい。

次に覚えているのは、三日月の夜、大田子の浜でたいた、小営火である。リーダーを含めて五人で雑談したり、歌をうたいながらたいた小さな営火だったが、あの黄色の炎、まだ頭の中に、はっきり残っている。

今回の移動キャンプ中、一番感激の深かった一時であった。この思い出、そっと片すみにしまっておきたいような、今の気持である。

もう一つ、忘れられないのは、足のまめ。昨年の、戸田―北川移動の時は、小さなのが一つできたのみであったが、今年は、大きな痛いのが両足にできてしまった。なんせ、渡辺上班と片岡カブ副長補がそろって「でっかいナー。」とおどろいたくらいのものであった。

二、三、今年のキャンプのことを、つづってみて、毎回多くの思い出や収穫を、残すキャンプ、つらかった時のこと程、後に楽しいキャンプ、「キャンプはいいナー。」と、あらためて感ずる。

拝啓　B・S殿

G・Sリーダー　馬場典子

私が、四団に来る前は、小さな団にいました。

そこは、本当にささやかな所でした。四団に移り、まず、人数の多さ、団の大きさに驚きました。

又、ご父兄が協力的で、自分達のプログラムが、思う存分出来る、という事です。技術的にも、とても立派なスカウトが多い事です。

でも、フット、それで良いのかな？　と考えます。

時代と共に、だんだん変って来ていますが、自分達の事ばかりでなく、周囲にも目を向け、又楽しい事だけでなく、いやな事も進んで出来る人　……

人の立場になって、考える事の出来る人が多かったら　……

と思います。

「無責任十の質問」

○少年隊副長　大内さんの巻

1. 漫画は好きですか
　— ノー
2. 愛読書は何ですか
　— 別にないけど
3. キリスト教を信じてますか
　— ぜんぜん
4. 自分をハンサムだと思いますか
　— 思わない
5. 女性にもてますか
　— もてない
6. 怒りっぽいですか
　— 割に
7. 好きな女優は
　— デボラ・カー
8. ラブレターもらったことありますか
　— しらない
9. 恋人は何人いますか
　— なし
10. 浮気っぽいですか
　— さあ、そんなのはしらない

父兄雑感

スカウトの輪を広げよう

団委員　宇田川　とし子

最近あらゆる方面から、スカウト運動が認められて来ている事は、喜こばしい事と存じます。青年の船とか、世界各国へ派遣される青年達の中には、数多くのスカウトが選ばれ参加しておりますが、その優秀な事が注目されつつある由で、本当に嬉しく思います。

それにつけても、残念なのはスカウトの数の少い事。我々の周囲を見廻しても、その数は少く一般の人達によく理解されていません。たまたまスカウトの事を知り子供を入団させ度く思っても、その収容力は希望者の一部分に過ぎない状態。誰でも自由に入団出来、スカウトの友情の輪の中に迎えてあげる事が出来たら……と思います。

それには各地区に新しい団を増設する事ではないでしょうか？　私達の様に二十年も伝統のある団にいるものは、その伝統の上に胡座をかいた格好で、教会に対する感謝も、リーダーの奉仕に対する感謝も忘れ勝ちで、当り前の様に過ごしていては、申訳ないのではないでしょうか。

新しい団を作る為には、奉仕して下さるリーダー、集会をやる会場等、どれ一つを取りましても、むずかしい事なのです。その中でもリーダーを如何にして育てるか？四団の様にシニア、ローバーとある大きな団としては、よきリーダーを育てる義務の様なものがあるのではないでしょうか。

現在の様にシニアーになるとガタッと減少してしまい、リーダーとして奉仕して下さる方は、ほんの一部になってしまうという現状は哀しい事です。そこには進学問題、学校のクラブ活動の問題など、社会全体として取り上げねばならない事もありますがスカウト自身が、後進の為に奉仕してあげようと言う気持、これを理解して援助して下さる、御両親の愛情も大切な事だと思います。

それと共にスカウトのプログラムも時代を反映した魅力のあるものである事、一つの殻に嵌らず、地域に結びついたものである事も、必要ではないでしょうか。

これらの隘路について〝どの様にしたらよいのか〟　皆さんと話し合い、よりよい社会となる様に、手を繋いで行きたいと思います。

ＢＳキャンプけんぶんろく

年少隊副長　里見明子

話のハズミとは恐ろしいもの。「ボーイのキャンプっていったいどんなことするの？一度見てみたいわ」　ひょいと口からでた言葉を「ワーホント？　今年はリーダーが少ないんだ、ぜひどうぞ。ヨロシク」と受けられ、私の方がびっくりした日から一ケ月、ＢＳのキャンプ見学の日が近づいた。

カブの舎営を無事に終え、たゞたゞ気楽に何でも見てやろう、と心楽しくその日をむかえた。

とにかくボーイのキャンプなるものを見たことも想像したこともない私は、健康以外何一つ誇ることもなく、リーダーの皆さんに御迷惑をかけまいとそればかり念じつつ東京を離れる。

丁度、前にデンマザーをやっていた時代のスカウトが大半なのでスカウトにはスムーズにとけこめ、まずは一安心。

サイトは私の親戚の山というわけで何度か行った事があったが、まず雑草に驚く。２ｍ位で茎が３センチもあるのが草なのだから嫌やになる。それをものともせず、テントサイトにする素晴しさ。ウロチョロしているうちに本部もテントが張られ、私にも工具や自転車と一緒ながらベルテンをたてて下さる。

一応行く前に柳隊長から、オブザーバーで渉外という役目をおおせつかったが、お料理ぐらいは日頃のウデで何とか手伝えるかと思ったのは間違いのもと、ＢＳのキャンプに行ったら私などまるで用なしという結論に達する。カレーライスがカレースープと化しても、おにぎりが手あかで少々黒くなったとしても、それ故に図太くかまえるキャンプ生活が男の子にとって、とても意義がある様に思えたのです。

もちろんカブとは目的も方法も違うので比較にはならないが、過保護が問題になっている此頃、考えさせられる面が多かった。

風むきによって位置を変えられる立かまど、竹で編んだ食卓、仕事の楽な立流し台それに調味料入れ、日に日にそんなものが作られていく。そのクラフトの他にハイキングに行き、リンツ野営をし、ファイヤーをたく。私の記録ノートはＢＳキャンプのＡＢＣでまたたくまにうまってしまった。

土曜、日曜にはたくさんの訪問者がある。カブのリーダー達、ボーイのＯＢ等、隊本部は大にぎわい。私のテントも大石ＧＳリーダー、原デンマザーをテントにむかえ、女性とひさしぶりにお目にかかりほっと一息。

ボーイの方針、日程にもよるが、父兄やその他多勢の人々にキャンプを見ていたゞく参観日があったらどんなに素晴しいことかと何度残念に思ったことでしょう。

６日間の何と早かったこと！　やっと少しはお手伝いが出来るようになったらもう帰る日。

スカウト活動は一貫教育などと云いながらカブの中だけしか見ていなかった自分に大いに反省の機会を与えてくれたキャンプでした。

幸か不幸か「里見さんを女の人なんて、ダーレモ思ってないヨ！」と、皆から云われたけれど、そのわりには、色々気を使って下さったリーダーのみなさん本当に有難うございました。お蔭様で２キロも太ることができました！　心からお礼を申しあげます。

報告

〃バザー〃　六月二十九日（土）
天候に恵まれ、多数の皆様の御協力を得、盛況のうちに終わりました。

〃団会議〃　七月十三日　出席者十七名
一、各隊集会報告
　どの隊もキャンプ準備のための二ケ月でした。
一、各隊キャンプ予定報告
一、合同リーダー研修会の件
　ＢＳ側委員は、百塚年長隊副長、辻少年隊副長補。
一、スカウト個人記録の〆切りは九月団会議まで延期とする

〃団委員会〃　七月十八日　出席者七名
一、キャンプ会計に関して
一、バザー報告

〃合同リーダー研修会〃　八月十七日～十九日　於藤沢市緑ケ丘ユースホステル
出席者　Ｇ・Ｓ七名、Ｂ・Ｓ十二名
テーマ「リーダーのあり方」
ＢＳ副団委員長の杉原さんをおむかえして、あらゆる角度からテーマを掘りさげディスカッションがなされた。

人事報告

○倉持雅人年長隊々員は、九月より少年隊副長補に就任しました。
○野口美知子前デンマザーは、園芸の勉強のため九月十二日渡米しました。

四十三年度夏期キャンプ

年少隊舎営
七月二十日～二十四日
西多摩郡羽村町七四一　国民宿舎清流荘
参加スカウト三十三名
リーダー　十六名

少年隊野営
七月三十一日～八月五日
静岡県伊東市富戸三の原　石川農園
参加スカウト　二十一名
リーダー　十名

年長隊移動野営
八月十日～十五日
伊豆下田～土肥
参加スカウト　八名
リーダー　五名

年少隊月の輪キャンプ
八月二十四日～二十五日
横浜市磯子区峯町七〇九峯の灸円海山
参加スカウト　八名　デンマザー三名
リーダー　五名

編集後記

皆がキャンプに行っている間に、病院の天井を見ながら感じたことは、看護婦さんて大変だなということ、病院生活ってのは考えてた程退屈ではないこと、手術直前に丸裸にされるのはたまらないということなり、扁桃腺を取ったら頭の重心が移り、その結果少々おかしくなったらしい（Ｔ）

東京にいた唯一人の編集者が右のようなわけで退院してきたと思ったら、暑気あたりをおこしてしまいましたので、４月まで一緒にやっていたよしみと今回は片棒をかつがせていたゞきました。（Ｓ）

今回はスマイル史上初めての十頁版ができ、これからの発展にとって大きな足跡を印したと委員みずから自負しております。

スマイル
発行日　昭和四十三年九月一日
発行人　田中正男
編集人　杉原正
発行所　港区赤坂一－一三－六
日本ボーイスカウト東京四団